

マジ まちに真剣になる。

「まちに活気が欲しい」「こんな居場所があればいいな」――

そう思ったことはありませんか？

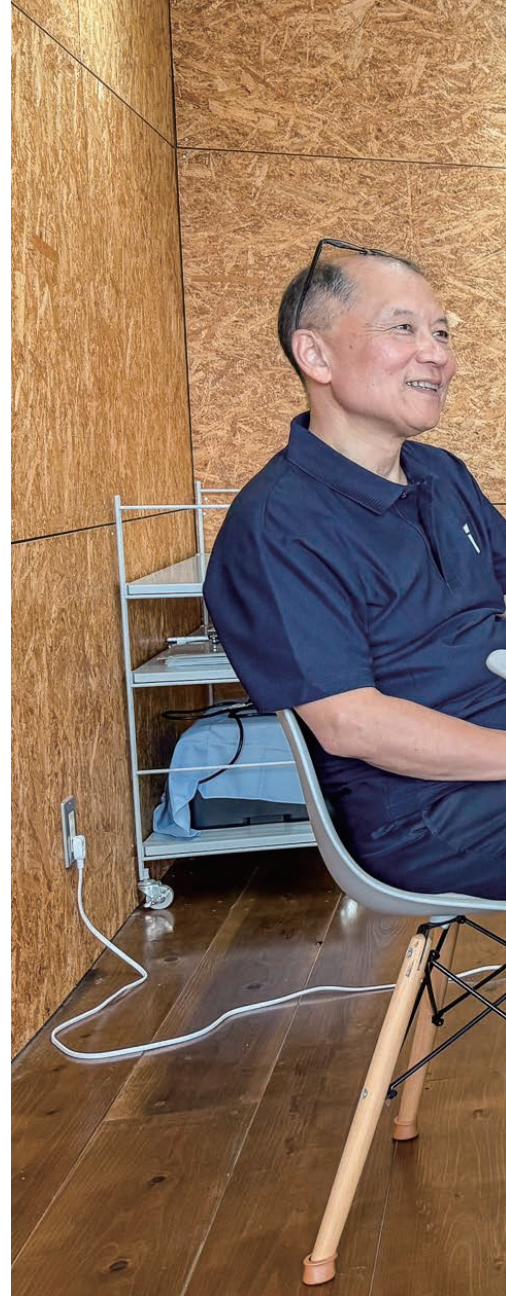
でも、実現は無理だと思って行動に移せずに終わった経験があるかもしれません。

しかし、石下地区を盛り上げたいという想いから、実際に立ち上がった人たちがいます。

彼らは「石下プロジェクト」という団体を設立し、自分たちでできることから始め、数々のイベントを企画・実施していきました。

彼らのまちを真剣に考え、まちの未来に向き合い続ける熱意が少しずつ市民や企業など常総に住む人々の共感を呼び周囲へと広がっています。

今月号は、そんな「石下プロジェクト」の活動に焦点を当て、市民が主体となってまちを盛り上げる様子を特集します。



石下を何とかしたい

「初めて石下のまちなかを見たときは寂しさを感じました」と石下プロジェクトの代表を務める鈴木さんは語ってくれました。

自身は定年退職後に市内の企業から声がかかり、昨年3月に入社。それに伴って都内から常総市に移住をしてきました。

都内でも地域のイベントを企画・運営する活動をしていたことから、常総市でも「何か活性化ができることはないか」思いついたのは、市主催のワークショップへの参加でした。

そこで知り合った仲間たちと2023年12月に団体を設立し、翌年1月から団体名を「石下プロジェクト」として活動を始めました。



石下プロジェクトの主要メンバーの3人
(左から)山中さん、秋田さん、鈴木さん



まずはやってみて、走りながら考える

昔の石下を知る人に話を聞くと、誰もが楽しかった日々の思い出を語ってくれます。主要メンバーの山中さんもその1人です。

「昔は、駅を起点として、人々が行き交い、駅通りと中央商店街は活気があふれていました。商店街に行けば何でも買えた。パン、ケーキ、駄菓子、おもちゃ、マンガ、模型など子どもが好きなものは全部あったし、商店街のイベントなども開催され楽しいまちなかでした」

しかし、大人になるにつれて、石下のまちなかから商店が減り、シャッター街になっていきました。

「このままで良いのか？何かしたほうが良いのでは？僕でも何か出来るのではないか」

そう考えて起こした最初の活動は「親子でデジタルお絵かきワークショップ」

これを機に、もっといろいろなことを始めようということで、活動の幅が徐々に広がり始めました。

「石下地区には親子で楽しめる場所が少ない」

そんな声から、自由に子どもが遊ぶことのできる場所を設けたり「大人の部活」、「フリーマーケット」、「スタCafé」。その活動は多岐に渡るようになりました。

「まずはやってみて、走りながら考える。石下プロジェクトはベンチャー企業のようなもの」と需要の把握、企画から実行までのスピード感が大事と鈴木さんは言います。

交わる視点が生み出す未来。 これからのこと。 これまでのこと、

石下プロジェクトで様々な活動を行う3人の中心メンバーに、その取り組みの内容やまちへの思いをインタビュー。

会社員、デザイナー、学生。

様々なまちとの関わり方から、まちづくりの魅力と可能性を探ります。



石下プロジェクト 代表
ミクロンスチール株式会社
鈴木 千彰 さん

石下プロジェクトは2023年12月に設立しました。
ゼロからのスタートでしたが、多数の協力者のおかげで多様なイベントを開催することができました。
また、活動を通じて地域の課題も見えてきました。
人口減少、若者世代の流出、高齢化等々です。

これらの課題は我々の活動を通じて解決できるのではないかと、「まちづくり」の基本は「課題解決」ではないかと我々のミッションが決まった瞬間でした。

とはいえ、難しく考えず楽しみながら活動するのが大好きですからポジティブに進めています。

最近は活動を知った団体や個人からイベントの共催や課題の解決方法を相談されるケースが増えてきました。相談内容は様々ですが、分析分類すると3つに集約され、解決の糸口は身近にあることも分かりました。やはり、地域の方は常総が好き（Like）であり愛（Love）があるんです。この想いを大事にしたいですね。

時代の流れや背景により役割は変化すると思いますが石下プロジェクトの活動を通じて常総市のファンを増やし、賑わいを取り戻したいと思っています。





常総デザイン
山中 邦彦 さん

鈴木さん、秋田さんとワークショップで出会い、親子向けのデジタルお絵かきワークショップを開催したことがきっかけで、石下プロジェクトを立ち上げました。

かつての石下は商店街が栄え、子どもたちが駄菓子屋や公園で遊ぶ、活気あふれるまちでしたが、今はシャッター街となり、その変化を寂しく感じています。それでも「このままではいけない」と思い、何かできることを模索しながら活動を続けています。

プロジェクトの中で、特に子ども向けイベント「こどものアソビ場」が成功し、子どもたちが夢中で遊ぶ姿に大きな喜びを感じました。また、少しずつですが、地域の方々から応援や助言をいただくことも増えてきました。これからも地域住民を巻き込みながら、石下を再生させていきたいと強く思っています。

今後は、ITを活用した街歩き企画や、駅前マルシェの開催など、新しい試みにも挑戦していく予定です。私にとってまちづくりとは、次世代につながる理想のまちをデザインしていくことです。



東京大学 教養学部 理科一類
秋田 そら さん

市主催のワークショップに参加した際「やっぱり地元が好きだ」という思いを再確認したのと同時に、常総市では市民主体のまちづくりがあまり進んでいないと感じました。そこで、この地域をより良くするために行動を起こすことを決意しました。

大学で学ぶ中で、ただ知識を詰め込むのではなく、それを地域に還元し、実践することが本当の学びになると強く感じたことも、プロジェクトに参加した理由の一つです。

学生としてまちづくりに関わることには大きな意義があります。学生は地域の一員として独自の視点や若者ならではの課題を発見でき、それを活かすことで、まちづくりに貢献することができると思います。私たちが提案し、行動を起こすことで、地域に新たなインパクトを与えられるはずです。

活動で特に印象深いのは、私が企画・運営した「スタCafé」です。この活動を通じて、多くの中高生が集まり、学び合い、刺激し合う場を作りました。

今後は、大学で学んでいる都市工学の知識を活かして、地域のまちづくりに貢献していきたいと考えています。



「石下」で広がる 人と人との繋がり

石下プロジェクトの活動を通じて性別・年代を超えた繋がりが生まれ始めています。

新たに生まれた繋がりは、お互いの経験や知恵を分かち合う場となり、地域全体に新しい活気をもたらしています。

石下プロジェクトでは、主催したワークショップやイベントを通じて、人々が自然と集まり、まちについて共に考え、まちの未来を築くためのコミュニティが少しずつ育まれています。

世代や立場を超えて集まった人たちは、日常の中で支え合い、新しいアイデアを共有し、石下の魅力を再発見しています。



石下プロジェクト
ホームページ

親子でデジタルお絵かきワークショップ



大人の部活 英語



フリーマーケット



スタCafé



大人の部活 歴史講座

かつては商店が並び、商店街ではイベントも開催され、遊びに来る人たちで賑わった石下のまちなか。

商店が次々と閉まりシャッター街となってしまった現状を見て、行動を起こした人たちがいました。

「思い通りにいかず再考、となるケースもありました。ですが、小さく不完全であっても早く動き出すことで周囲が少しずつ関心を持ち、活動の輪が広がることを実感しました。ずっと机上で考えるのではなく、勇気をもって足を動かし行動すれば、何か変化が起これるということを、身をもって実感しました」と秋田さんは話します。

石下プロジェクトが起こした変化により、年代を超えた交流が生まれ、新たな賑わいが生まれつつあり、それに賛同する人や団体も増えてきています。

「この活動には協力が必要です。やりたいことがある人は私達と一緒に盛り上げませんか？魅力的なまちにしましょう」と鈴木さんは語ります。

「常総には何もない」という人もいます。

しかし「何かしたい」と思ったときに、それを形にする力が、ここにはあります。

常総市で挑戦してみたいことがあれば、ぜひ行動を起こしてみてください。

あなたと同じ想いを持つ人に会えるはずだから。



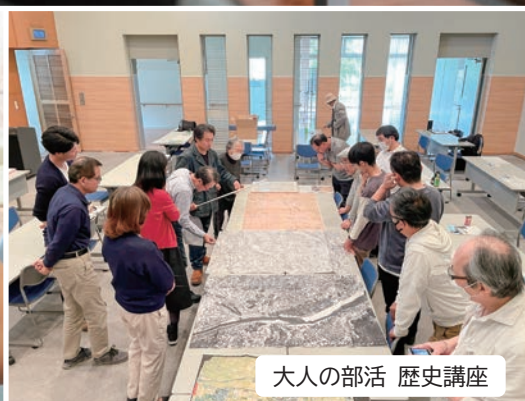
新しい活気が生まれていく。

まちが面白くなりそうだ。

大人の部活 英語



親子でデジタルお絵かき
ワークショップ



大人の部活 歴史講座



スタCafé

あなたも、まちに^マ真^ジ剣になってみませんか？